
記憶

真抖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶

【コード】

N3380Q

【作者名】

真抖

【あらすじ】

僕は、“彼女”の『すべて』を愛する――。(2007・5・27)

— 死んでしまった。

目の前で、
“彼女”
は生きることを選んだ。

何故？

何故、何故、何故、何故、何故、何故、何故、
何故、何故、何故、何故、どうして――

何度問うても、答えは出ない。ただ、動かなくなった。

⌈
⋮
⌋

医者が何かを言っている。僕は聞き取ることができない。

事故なんて、こんな大惨事が僕の身近な人に降りかかるなんて思
いもしない。

でも、現実はその横たわっている。

「……の……ドナー登……」

「娘がそ……ええ……が、望むのなら……」

遠くで聞こえる、
“大人”達の声。僕に聞こえないよう、囁かれる秘め事。

ドナー？
登録？

微かに、僕の耳に聞こえた言葉に、僕は震えた。
違う形で——生きる。

僕の、“彼女”が。

僕だけの——そう、僕のお人形。

数日後、移植は無事成功したと話に聞いた。

相手は——20代の女性。名前も顔も知らない。

でも、僕にはわかる。

街で、駅前で。すれ違った、女。

一目見て、僕の鼓動が強く波打つ。——ああ、そこに居るんだね。そこで、そんなに切なく僕を呼んでいるんだ。

平凡な顔立ち。“彼女”には負ける。でも、薄化粧された肌は綺麗だ。

つい、声をかけてしまった。

「人間違いだなんて、面白い人」

「いえ……すみません、呼び止めちゃって」

お詫びにカフェにでも、なんてナンパしているかのような台詞。僕にはそんな言葉しか思いつかなかったけれど、女は笑って承諾してくれた。

一時間近く雑談。その後、互いの携帯の電話番号とメールアドレスを交換した。

ああ、これで。

僕は再び“彼女”と出会える。

中澤美紀。それが女の名前。×××社に勤めるOL。

なかなか話が合い、僕はすぐに美紀の友人となった。気が向けば食事に行き、遊び、旅行にも行く。肉体関係なんていらぬ。僕は“ただの”友人。

女体に興奮なんてしない。僕が欲しいのは――

そう、“彼女”だけだったのだから。

“彼女”でないものに、興奮などするものか。

そう、僕は美紀をそんな対象に見ることはない。できない。

「……最悪」

「どうしたんだ？ 美紀」

「二股されてたのよ。思い切りひっぱたいて、帰ってきちゃった」

話によれば、女友達とショッピング中に、ばったり「用事があった一緒にいけない」と言っていた彼氏に出会ったのだという。

——隣に、見も知らぬ女を連れて。

なんとか取り繕うとしていた男に詰め寄るが、女に「お前の方が遊びだ」というような言葉で散々罵られ、男はそれを否定も肯定もしなかったらしい。つまるところ、美紀がその程度の女だったということだろう。

悲しんでいる。「彼女」も。

それを見ると、僕はいたたまれなくなつた。そんな男はこの世に居なくなってしまうが良い。

そうだろう？ “君”を悲しませる者たちなんて、この世に要らないんだ。

だから、安心して。僕が始末してあげる。

軽く、背を押すだけ。

それだけで、男は、腰に縛り付けられた縄の先の、何ともいえない形相で柱にしがみついていた女共々底へと落ちていった。

ほら、見て。

これで“君”を悲しませる者は居ないよ。

数日後のニュースで、産業廃棄物を破棄するための穴の中から男女の遺体が発見されたという報道がなされた。2人は腰を縄でつなぎ、無理心中を図ったのだらうとキャスターは言っていた。

それを聞いて、僕は上機嫌で美紀に会った。彼女はニュースに驚いていて、真っ青な顔をしていた。

——何故？

せつかく、喜ばせようとしたのに。

「……馬鹿みたい。まだ未練残ってたのね」

震える手で美紀はコップに水を注ぎ、一気に飲んだ。

僕がしたこと、“彼女”が喜ばないだって？
そんなこと、あつてはならない。

“彼女”なら、“彼女”なら喜んでくれたはずだ。
ありがとうと笑顔で言つて、僕に抱きついてくれる——

頭の中が真っ白になって——気が付いたら、僕は。

「ちょ……とっ、痛いっ」
「……あ」

美紀に体当たりし、床に押し倒していた。馬乗りになり、その両腕をまとめて片手で押さえている。

僕は、何をしようとしている！？ 何を、何を——

僕の体の下で、美紀がもがく。
判断は、一瞬だった。なんの迷いもなく。
その首に、手をかけた。

「ぐつ……が……あつ……」

「僕は悪くない。僕は悪くない、僕は悪くない僕は
 悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない。君が悪いんだ、
 君が、君が、君が君が君が君が君が君が君が君が君が君が
 君が君が君が君が君が君が君が君が君が君が君が——
 君が、喜ばないから」

美紀は苦しいのか、僕の両腕を引掻いたり外そうと手首を握ったりしていたけれど、僕は少しも緩めなかった。

これは、お仕置きなんだ。

そう、僕の愛を否定しようとした、君への。

「ぎゅっあ……じゅ……がつ……」

「そんな子是要らない。君は“彼女”に相應しくないんだよ——美紀」

最後に、ぐつと力を込める。たったそれだけで、美紀は口角から白い泡を吹き出して白目を剥き出しにした。両手がぱたり、と力を失って大の字に開き、じたばたしていた足も動かなくなった。

——ああ、まるで“彼女”のよう。

僕だけのお人形が、戻ってきたかのような錯覚がそこに在る。

「ああ……ごめんね、苦しかったね」

小さく、美紀の唇が動く。それは、僕の名前を呼んでいた。

——そうだ。これは、何時もの……少し、違う。でも何時もの情景。

幻聴でもいい。僕には“彼女”が呼んでいる声が聞こえて——ぞわっ、と何ともいえない喜びに肌が粟立った。

でも、それ以上は禁忌だ。触れてはならない。繋がりたくても、僕はそれをしてはいけない。それだけが約束。それをしなければ“彼女”は何度でも蘇ってくれる——優しく微笑んで、僕を撫でてくれるのだ。

でも、そう。これは「違う」んだ。

「……今、出してあげるよ」

白い肌に指を這わせ、邪魔な衣類を剥ぎ取る。鎖骨が、僕を誘っているように見えて、そのラインを僕はなぞる。その下に、それなりに大きな、ふくよかな乳房。でも“彼女”には負ける。

しとめたと思っていたけれど、“彼女”にするときのように——

少し力が足りなかったようだ。肌はまるで死人のように温度を失っているのに、微かに、胸が上下している。

まだ、“彼女”はそこにいる。

“彼女”を守っていたことを誉めるように乳房を愛撫すると、僕は靴から、それほど大きくはないナイフを取り出した。そして、そつとその谷間にある手術痕に押し当てる。

「――」

刺し込んだ途端、美紀が目を見開いて痙攣した。構わず、僕はゆっくりと手を動かし、切込みを開いた。

ああ、みつけた。

筋に守られるように、それは静かに波打っていた。きっと“彼女”は再び僕に出会えたことを喜んでるに違いない。

ぬちゃり、と音をさせながら僕は手をつ込み、“彼女”をゆっくり、管が切れないように丁寧な、丁寧に取り出した。

僕の手のひらで、切なく鼓動を繰り返す“彼女”が愛しくて――僕は、手のひらの『心臓』にキスをした。

これから、また、ずっと一緒にいよう。

通報を受けてやってきた警察が、その血生臭さに気が付いて無理やり玄関のドアをこじ開けた時。友人は血まみれのまま笑っていたという。

狂気の犯行の直後だったのか、友人が大事に手に包んでいた心臓

はまだ鼓動を繰り返しており、女性は奇跡的に一命を取り留めたという話を聞いた。ただ、目が覚めた女性は以前とは全くの別人のようになっちゃってしまっているらしい。

友人は、妹の心臓が移植された女性を見つけ、何を思ったのか。元から仲の良かった兄妹の間に何があったのか。2人の間のことは知ることは出来ない。

ただ、現在においては。

2人は、不気味なほど——別人だと分かっているのに。まるで本当の兄妹のように仲良く寄り添いながら、私の目の前に並んでいる。

「だからね、奇跡は信じてみるものなんだよ？ 総一」

——『ほらね。心臓には、大事な記憶が刻まれているんだよ』
友人の顔をした“それ”は、そう言って私に笑いかけた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380q/>

記憶

2011年1月26日02時25分発行